

# スミセイ ライフフォーラム「生きる」

いのちを ささえる うた と ことば

## テーマ：「私を救った出逢い」

◎ 講師：新垣 勉

2011年12月10日(土)、  
広島県の広島国際会議場フェニックスホールで  
「いのちを ささえる うた と ことば」と題して、  
テノール歌手・新垣勉さんの講演  
(第2部は歌と語りのコンサート)が行われました。

今回の会場は広島平和記念公園内。沖縄育ちの新垣勉さんは広島の人々と平和への思いを共有したいと語り、“この広い野原いっぱい”を伸びやかに歌ってステージの幕を上げました。講演のテーマは「私を救った出逢い」。新垣さんは、戦後に米兵の父と日本人の母との間に生まれ、そして出生後まもなく不慮の事故で全盲に。両親の離婚後は祖母と暮らし、祖母を歌の先生に成長したと話します。「貧しい生活でしたが、祖母は辛いときでも歌っていました。そんな姿から、歌には人を元気づける力があることを知ったのです」。そして、さらに歌にのめり込んで行ったのは、盲学校2年生の出来事。「授業で“シャボン玉”をドレミで歌えずにしょげていたら、上級生が毎日オルガンで音階を弾いて聴きなさい、と教えてくれたのです。それを実行したところ“絶対音感”が養えたのです」。中学校では教師に“語学向きの舌だ”と言われ、ラジオで英語を猛勉強。「発音は『私より素晴らしい』と教師にほめられ、以降は90点以下だったことがないほど英語が大好きになったのです」。ときには得意のダジャレを交えながら語られる新垣さんの半生に、会場の聴衆は一気に引き込まれていきました。

続く話は、祖母が14歳で亡くなった時のこと。新垣さんは絶望の淵に立たされたと言います。「多感な年頃だったので自分は世界一不幸だと思い込み、父を捜して殺そうとまで考えた。でも、僕の話に心から涙してくれた牧師がいた。それが生きることを真剣に考え、神学校へ進むきっかけとなったのです」。ただ、その人生はさらに波乱に満ちていました。歌への思いを貫き、34歳で音楽大学へ進んで声楽を学んでいたときに、ヴォイストレーナーの世界的大家であるA・バランドーニ氏に「君の声にはラテン的な明るさがある。その声で人々を励まなさい」と言われたのです。「ラテン系の父譲りの声をほめられ、それまでの両親に対する憎しみが消えていきました。人生とはそんな出逢いで決まるもの。出逢いこそが財産なんです。そして言葉は言霊。言葉は人を勇気づけ支えるものなので、みなさんもぜひ宝石のように輝く言葉を友だちや子どもたちへ、地域へ投げかけてください。それが平和の輪を広げていく原点になると思います」と語りかける新垣さんに、会場は静かな感動に包まれていました。

第2部はピアノの伴奏も登場し、歌と語りのなごやかなコンサートに。東日本大震災の鎮魂歌として発表したアルバム「平和の歌」から「雨二モマケズ」と「青い海よ」が披露されたあと、定番曲となっている「愛燦々」や「さとうきび畑」を熱唱。続いて広島少年合唱団とともに「翼をください」を合唱すると、会場の聴衆との一体感はさらに増していきました。



主催：公益財団法人 住友生命健康財団  
後援：広島県、広島市、  
広島県教育委員会、  
公益社団法人 広島市視覚障害者福祉協会、  
住友生命保険相互会社 広島総支社